

第18回 震災対策技術展 最先端の知見と REIC が注力する技術・ソフトを披露

第18回「震災対策技術展」が2月6日～7日の2日間、パシフィコ横浜で開催された。南海トラフ巨大地震、首都直下地震など大規模災害への危機感が高まるなか、201の団体・企業が出展、2日間で1万4408人（主催者発表）が来場した。同時にシンポジウム・セミナー、出展者によるプレゼンテーションも多数開催された。

こうした中で、REICでは、今年も（独）防災科学技術研究所と国土セイフティネットシンポジウム（第13回）を企画・開催した。

今年のテーマは「リアルタイム防災情報の開発動向」。

東日本大震災以降も豪雨など記録的な自然災害が多発し、リアルタイム情報へのニーズがより高まっている中での本シンポジウムでは、防災・減災のエキスパートが、「地震、津波情報」「長周期地震動」「ゲリラ豪雨などの気象情報」の開発状況、さらに「一般市民向け情報配信のノウハウ」「ビッグデータの活用」などについて、もっとも新しい知見を披露した。

一方、展示ブースでは、「情報が命を救う」というテーマで緊急津波避難情報システムのデモンストレーションとコミュニティを対象とした同システム体験モニター募集の告知、コミュニティFM局で稼働中のエリア防災情報表示端末「i-Board」の展示などリアルタイム防災情報の開発・提供・発信に注力するREICの活動をアピールした。

[展示ブース及びシンポジウム会場内の様子]

